
それはまるで星のよう

長谷川ちず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはまるで星のよう

【Nコード】

N0734Z

【作者名】

長谷川ちず

【あらすじ】

ある日の朝、友人は登校するなり訊いてきた。

「青春とはなんだろう？」

プロローグ

「さて佐藤氏、ここで問題だ」

「え？ いきなりなに？」

「青春とはなんだろう？」

少し気怠い朝、教室に来るや否や、鈴木君は黒い太縁眼鏡を上げながらそう切り出した。

「せ、青春？」

「そう、青春だ。青い春と書く、あの青春だ」

「えっと……よくわからないけど、部活で大会優勝を目指したり、か、彼女と学校生活を過ごしたりとか……？」

「ふむ。確かにそれは青春っぽいな。では部活に入らず、彼女もいなければ青春はできないのか？」

「それは違うんじゃないかな。他にも色んなことで青春してる人もいると思う」

「その色々とは？」

「う、うーん……」

部活や恋愛だけが青春だとは思わない。でも、その他のことを訊かれても、とっさには何も思い浮かばなかった。

「やはり、な。青春というものは、言葉こそよく知られているが、その実態を知る者は少ない。だが佐藤氏、一つだけ確実にわかっていることがある」

鈴木君は自分と僕を交互に指差す。

「俺も佐藤氏も、青春していないということだ」

「……あー、それは確かだね」

言われるまでもないことだった。なんとなく胸に刺さるものを感じる。ダウン寸前の僕を救うゴングのように、チャイムが鳴る。

「む、続きは後にしよう」

「まだあるの……？」

「むしろ本題にすら到達していない」

「えー」

「では、また後でな」

席に向かう鈴木君を、僕は机に伏して見送った。

ショートホームルームに続いて一時限目の現国が終わる。次の時間に使う物理の教科書と、ついでに読みかけの文庫本を出して、しおりの挟まったページを開いた。

「ライトノベル、実に便利なアイテムだな」

「うわっ！」

突然伸びてきた手に本が奪い取られる。鈴木君は空いている手で眼鏡を上げると、僕の本に目を通した。

「ふむ」

「か、返してよ！」

咄嗟に奪い返そうとするも、鈴木君は本を高く上げてかわす。

「読書中だから一人でいてもおかしくない。しかもこうしてブックカバーを付けていれば、一見ただの小説だ。知的で真面目な雰囲気を出せる」

「そ、そんなこと……！」

「なに、恥じることはない。俺もよく使う手だ」

鈴木君は本を閉じて机に置く。しおりはでたらめに挟まれた。

「しかし、現状に満足してはならない。佐藤氏よ、周りを見てみる」
そう言って鈴木君は僕の頭を掴んで回した。見てみると言われても、特別変わった何かがあるわけじゃない。いつもの休み時間のワンシーンだ。

少し卑猥な話で盛り上がる男子達。

最近流行りのアイドルグループに黄色い声を上げる女子達。

友達に借りた物理の宿題を必死になって写す人。

教室の隅で何かを囁き合い、笑みを交わす学内カップル。

取り立てて、今更注目するところなんてー。

「どうだ、何の変哲も無い、平凡な日常だ。それなのにどうして、俺達はあの中にいないのだろう？」

「それは……」

「佐藤氏よ、我々は直視するべきではないか？ 我々の立ち位置と
いうものを」

鈴木君は再び僕の頭を回すと、インドア派特有の真っ白な顔を近づけてきた。

「ちょっと、近い、気持ち悪いよ」

「ふむ、気持ち悪いのはお互い様だが、確かにこれはやめておこう」
鈴木君はようやく僕の頭を離して、不健康そうな顔を遠ざけた。

「さて、話の続きだが、佐藤氏は自分の立ち位置を客観的に見られているか？」

「立ち位置っていうのは？」

「もちろん、クラスでのポジションに決まっている。そうだな、わかりやすくランクにしよう。クラスがAランク、以下Dまでの四つの内、自分はどこだと思う？」

「AからDで？ うーん……」

もちろん、Aじゃないのはわかっている。そんなのは考えるまでもない。

ならBかというのと、それも違う。

Cはどうだろう？

机に置かれた、ブックカバー付きのライトノベルを見る。

「僕は、Dかな」

「残念、ハズレだ」

即答だった。思わず、Dと答えた苦笑のまま固まってしまう。鈴木君は眼鏡を上げて腕を組む。

「いいか佐藤氏、我々はCだ」

「で、でも鈴木君はさっき、僕達は最下層みたいな言いようだったよ」

「最下層、か……。或いはそっちの方がまだ良かったかもしれない」
「なに？　どういうこと？」

「ふむ、佐藤氏よ」

鈴木君は急に囁くように声を落とした。

「佐藤氏はいじめられたりしているか？」

「え……？」

「俺の知る限り、そんなことはないと思うが」

「う、うん。そういうのはないよ」

「そうか、ならいいんだ。いいか、Dランクとはクラスの最下層になる。それはつまり、いじめられっこのことだ」

「あ、そ、そっか」

「我々はいじめられてはいないし、当然クラスを中心でもない。加えてBというほどクラスに馴染めてもない。故にCだ」

断言されると、自分の立ち位置がCだということがすんなり納得できた。なんというか、しっくりくる。

「あれ？　でもさっき、鈴木君はDの方が良いかもって言ってなかった？　僕にはそう思えないんだけど」

「今は、な」

「今は？」

「我々は永遠に学生ではいられない。二年と少し経てばこの学校を卒業し、さらに二十年三十年、もしかすると百年は生きるかもしれない」

「百年はちよつと……」

「ふむ、少し言い過ぎた。とにかく、長い年月を過ごすことになる。そして、ふと過去を顧みるのだ。あー、あの時は……と」

年老いた自分を想像してみる。場所は縁側で、手に湯呑みを持っているのは定番通りだ。

「そういうこともあるかもね」

「しかしだ、年老いた我々は重大なことに気が付く。そういえば、特に思い出すような出来事はないということに」

「あ……」

「それならば、思い出せることのあるいじめられっこの方が良いでしょう」

鈴木君の言う未来はあまりにも寂しすぎる。何のために生まれたのか、そんなことを考えながら死んでいきそうだ。

「そこで朝の話になる」

「朝のって、青春の話？」

「そうだ、青春だ。俺は今、青春したくてたまらない」

鈴木君は窓から空を見上げてそう言った。

「な、なに？ そんないきなり」

「実は先週の金曜日にこんなことがあった」

遠い目をして鈴木君は語り始める。

「テレビで、某耳をすます映画を放送していたな、それを見たんだ」

「うん、それで？」

「以上だ」

「うんうん……って、それだけ？」

「そうだが」

「遠い目なんてしてるから、何かすごいことがあったのかと思ってたよ」

「ふむ、すごいことはなかったが、効果は抜群だった」

「ああ、そう……」

力が抜けて、僕は机に伏した。確かにあの映画を見ると、すごくむずむずというかそわそわというか、そんなよくわからない感じがするけど。

呆れる僕に構わず、鈴木君は話を続ける。

「青春したいという気持ちはあるのだが、俺はバイオリン作りで生計を立てるつもりはないし、最近の図書館では貸出カードは廃止されている。ならば別の青春をと思い、現在模索中だ」

「僕に青春が何か聞いたのは、そのためだったんだ」

「いかにも。しかし、それだけではない」

「他にも何かあるの？」

鈴木君は突然、僕の手を強く握った。

「佐藤氏よ、氏は俺と同じくCランクの境遇にある」

「う、うん、さっきそう判明したね」

「先に待ち受けるのは、空虚な老後だ」

「うっ……」

「ならばどうだろう、ここは互いに協力しあい」

鈴木君の手に一際強く、力が籠もる。

「青春しないか？」

プロローグ（後書き）

どうも、長谷川です。

いつもはショートショートばかり書いているのですが、ふと思い立って連載小説というものに挑戦することにしました。

あまりにも不馴れな形式ですが、なんとか完結まで漕ぎ着けるよう頑張りたいです。

どうか暖かい目で見守ってやってください。

では、続きが早く出せることを祈って。

届け、電波。

るるるるるるるるるるるる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0734z/>

それはまるで星のよう

2011年12月2日20時54分発行